

光明

第十卷第十一號

いたりてかたきは石なり
 至りてやはらかなるは水なり
 水よく石をうがふ
 心源もし徹しなば菩提の道
 何事か成ぜざらん

日本光明會本部發行

大正

郵便物認可
五日發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年十月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光明 第拾卷第十一號 【定價金拾錢】

◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に憫む、されど、傷き痛み憫める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如
來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親罪惡深重
煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたま
ふ永遠の光明。聞かせん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くは自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰辯し、策勵して、相愛に生きん哉。

◆本領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道
に精進せよ。

救はれたる者け立つて、全人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の
社會に猛進せよ。

◆ 祝 奉 ◆

聖上陛下、京都に行幸まし〜て御即位の御大典を擧げさせたまふ
瑞雲宇内にたなびいて、歡喜の聲國の内外にみつ

聖德無量

皇恩無邊

菊花かほる所、蒼生生きる日の幸を歌ひ

國旗の翻る所、蒼生盡忠の赤誠に奮起す

竹の園生彌榮々にさかえますこと畏くも尊し

東西兩文明の粹、建國の大精神に融合して世界文化の曙こゝに開か
んこと昭和維新の使命なり。

起て同胞、共に捧げん、我等の全てを、昭和維新の聖業へ

聖壽萬歳、謹みて奉祝の微意を捧げ奉る。

二河白道講話 西岸招喚

住岡狂風

前號までの大略……一人の旅人がある。誰一人もない無人の曠野を西に向つて旅を急ぐ、忽ち前に左に火の河、右に水の河、其中間に幅四五寸の白道があらはれる。後からも横からも群賊悪獸があらはれて追ひかける。彼は全くゆきつまる。其時、東の岸に大善智識釋尊の教へ、『汝決定して此の道をたづねてゆけ、必ず死の難なけん。』とのやりごねを聞く。と同時に其ごねは久遠のみ親たる阿彌陀如來の西岸からのよびごね『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことをおそれざれ。』との勅命を聞く……

本文

又西岸上に人有つて喚ばうて言はく『汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ。』と

『汝……一心……正念にして……直ちに……來れ！』
前號においては、如來の勅命について味はふて來ました。如來は『汝一心正念にして直ちに來れ。』とよびたまふてあります。その汝ごは何であるか。一心ごは何であるかを前號で申しましたから、本號では『正念』について味あはせて貰ひませう。恐禿鈔を開いて聖人に聞きますと、『正念』の意味を三つの言葉で云表はしてゐられます。

『正念と云ふは

選擇攝取の本願なり

また第一希有の行なり

金剛不壞の心なり。』

そこでその三つの言葉について考へさせていたゞきます。先づ第一に正念といふは選擇攝取の本願なりのお言葉です。正念、正しい念ひ、如來は我等に『汝一心で正念に來れ！』とよびます。邪念であつてはならない。正念でなければならぬ。正念であることは救はれてあることである。一心正念であるすがたこそ如來に歸命したすがたであります。然らばその正念は如何にして生れるのであらうか。それは即ち選擇攝取の本願によるのである。選擇攝取の本願とは、法藏菩薩の本願であります。一切衆生を救はずんばと誓ひたまひし如來の本願であります。第十八願であります。大無量壽經をひもとく時、如來は因位法藏菩薩となつて四十八願をたてましたことを説いてゐます。さうしてその四十八願は第十八願によつて代表せられます。故に第十八願

を本願中の本願と云はれます。この第十八願こそ選擇攝取の本願であります。その如來の本願方によつて我々は救はれるのであります。

『正念といふは如來の選擇攝取の本願なり、』正念でなければ助からない、しかしその正念とは、凡夫の迷心、凡小のはからひから生れる心ではなくて、如來の御本願によつて生れるのであります。如來の本願一つによつて來れどの仰せであります。まことに正念とは凡夫のこゝろではなくて、如來のみ心である。その如來の願心が我等の上に顯現れて下さつて我々の信心となります。信心は正念であります。邪念であつたり疑念ではありません。合掌念佛のこゝろは、この正念であります。正念とは、如來の本願が廻向顯現せる心であります。

次ぎには、正念といふは『第一希有の行なり。』とあります。

第十八願で十方衆生を如來の本願一つで救ふことを誓つた法藏は、第十七願の上で

は南無阿彌陀佛の名號成就を誓つてゐられます。第十八願は十七願の名號の上に成就せられるのであります。この第十七願で誓はれたお名號が、衆生の上にお念佛となつて生れてきます。『第一希有の行』とはお念佛申すことであります。

親鸞聖人は御本典の行の卷に、『謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり、大信あり、大行とは則ち無碍光如來の名を稱するなり。この行は即ちこれ諸の善法を攝し、諸の徳本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德法海なり、故に大行と名づく。』

と云はれてあります。往相廻向、淨土へと往生してゆく者には、大行があり、大信がある。大行といふのは無碍光如來のみ名を稱へることである。この具體的なお念佛は如來の御本願より生れ出でたものであるから、一切の善法、一切の徳本を具足してあります。

由來絶對他力教では、信心が高潮せられます。我々が助かるのは唯信心によつてである。信心一つによつて助かる………まことにさうであります。しかし信一つ

と云ふことは、行がないといふことではない。信心不二と申して、信をはなれて行なく、行をもたない信もありません。大信と大行とははなれることの出来ない關係にあります。

善導大師や法然上人によつて實行され高潮せられた専修念佛と云ふことが救済の條件であるように受取られて、唯稱へさねすれば助かること、形だけの念佛をばげんで稱名正因の邪義におちてゆくことは大きな間違ひであります。これは如來のみ心を凡夫がはからつて、無條件の救ひに條件をつけることになりません。

しかしながら稱名正因の邪義にこりた淨土教徒は羨にこりて膾をふくの類です、念佛を稱へると自力になるように考へはじめたこともまた、大きな間違ひであります。それは法体自然の妙用を人間のからはからひでさまたげるものであります。はからひなく南無阿彌陀佛とお念佛申すことは信心の生きたはたらきであります。如來の御本願にはぬぬいた信心は、かならず行となつて動きます。信は靜的なものではなくて、動的

なものであります。

御本願文の

「假たとひ我佛われがうを得たらんに、十方衆生じつぱうしゆじやうしん至心しんげふに、信樂しんげふして、我が國くにに生れんと欲おもはん、乃至な十念じじゆなんせんに、若もし生れずんば正覺しじゆがくをとらじ………」

至心しん、信樂しんげふ、欲生よきしやうとは信しんの一いっにまごめられます。眞實しんじつの一心いっしんの三相さんじゆにすぎません。この信しん一念いっしんに救すくはれた者は、乃至な十念じじゆなんと相續そうぞくします。この乃至な十念じじゆなんとは一生相續いっしじゆぞくの念佛ねんぶつの行ぎやうのことであります。

正念しじやうなんにして來きたれとは、唯ただお念佛ねんがう一つによつて來こいどの御思召おんおほしめしであります。

「親戀しんけんにおきては唯念佛たねんぶつして彌陀みだにたすけられまひらすべしとよき人ひとのおほせをかうふりて、信しんずるほかに別べつの子細こさいなきなり。』

とは聖人しやうにんの信仰しんぎやうの純じゆんなる告白こくげくであらねばなりません。

金剛不壞の心

第三だいじに正念しじやうなんとは『金剛不壞こんごうふゑの心しんなり』であります。

金剛不壞こんごうふゑといふ文字もんじは、佛典ぶつてんには甚はなはだ多く用もちひられてあります。涅槃ねはん、如來にょらい、佛性ぶつせう信心しんぎん、などの説明せつめいには常つねにこの金剛不壞こんごうふゑの云棄いひを用もちひてあります。金剛こんごうとはかたいこととの象徴しやうちゆうであり、不壞ふゑとは、こはれない意味いみであります。かたくしてこはれないことが金剛不壞こんごうふゑであります。涅槃ねはんも金剛不壞こんごうふゑであり、如來にょらいも佛性ぶつせうも金剛不壞こんごうふゑであり、如來にょらいに根ねざす、信心しんぎんも金剛不壞こんごうふゑであります。

一切いっさいのものは亡ほろびます。生うまれたるもの、つくられたもの、それら一切いっさいは諸行無常しよぎやうむじやうであります。私自身わたくしじんが亡ほろぶものであり、私自身わたくしじんのしたことも、作つくつたものも亡ほろぶものであることがわかつた時とき、亡ほろびないものを求めすにはゐられませぬ。

亡ほろびぬたつた一つのもの、それは、如來にょらいであります。如來にょらいのみは生死しじゆじを超こえて靈存れいぞん

します。その如來の本願に根ざした信心、本願そのものゝ顯現である處の信も亦金剛不壞であります。一切は亡ぶものであります。しかし信のみは永遠の生命であります。如來は亡ぶる煩惱性を技巧することをやめて、如來によつて往生せよ、來れよとよびたまふのであります。

しかし考へておかねばならぬことは金剛不壞といふ言葉の意味であります。それは決して固定したかたさを云つたものではないことであります。凡夫の思ひをかたいぢにかためたり、執着したりすることが決して金剛ではありません。むしろ、さうした執着や、自力の堅心を破つて、肩のこりのない安らかな世界であります。如來のみ常往であり不壞であり、金剛であるとは決して、石のような固定的なかたさではありませぬ。

かくて正念とは、如來の選擇攝取の本願であり、それから廻向せられた、希有第一の行であり、それはやがて金剛不壞の心であります。一汝一心正念にして直ちに來れ……

……」とは如來の本願の大道に乗托して來れの思召であります。(つゞく)

十週年を迎へて

住 岡 狂 風

□

粗末な田舎の小学校の宿直室に、たつた一圓出した貧弱な机があり、たぼけた火鉢が一個、外には書物が澤山立てたり積んだりしてあるだけです。

彼は淋しいのです。長い孤獨な寂しい生活が続いたのです。その寂しい生活の唯中にたつた一つの念佛が生れました。重いからまる鐵鎖にくゝられた宿業の子は、單純に生きてゆくには、あまりに恵まれてゐませんでした。

人一倍鋭い魂をいだいて、もう五年間、彼の心の芽はつまれるだけつまれたのです。苦しみ悩み疲れ、さびしんだ後の勉學讀書、彼はやつと、あわぎく努力しました。しかし何もわからなくなつた結果が、信仰の門をたゝきました。さうして如來の慈光に蘇つた時、彼は二十四歳をむかへてゐました。

大正七年もおしせまつて暮れてゆく頃、ごもすれば寒い冬風に、雪さへ降つて、盛山の頂きを白うする十二月、この宿直室では一つの計畫が立てられました。彼と共に學んだ青年と心の通ひをつゞける意味で刷物が配られました。さうしてそこに生れたのが光明團でありました。

大正八年の一月から若い青年男女の間に騰寫すりの光明第一巻第一號が配られました。たつた數十冊です。それから丁度十年たちます。一口に云へば十年です。しかし涙ぐましい歴史をもつた十年間であります。

□

光明團をはじめますと、役場の人たちは先づ大賛成で、紙をくれます。學校の騰寫版がボロなので役場のを貸してくれます。しかし發行部數が増すにつれて、紙も貰ふわけにはゆかなくなりました。騰寫版も買はなくてはならなくなりました。

初めは青年男女が進んで刷ることに熱心につくしてくれました。或る時は感激に燃えつゝ數多の人が手傳つてくれてゐても、半年たち一年たつ間にはたつた一人になることがあるものであります。

夏の暑い夜、佐々木數人君と二人で小虫の何千何萬と飛んでくる教室の中で汗を流しつゝ泣く思ひで續けたこともあります。佐々木君の手にまめが出来ます。私の手にもまめが出来ます。やがてまめがやぶれて血が出ます。手に繃帯してすりつゞけます一枚づゝ紙を折つて一冊づゝにとつてゆきそれを、ホツチキスでとぢます。毎月子供

が手傳ひました。さうして忙しい中にやつとつづけて來ました。もうやめよう今月限りやめようと思つたことが何度あつたか知れなかつたのです。

卒業生が廣島市をはじめ各地にゆきます。其處で友人が出來ます。友人が誌友になります。誌友たちに勵まされて二ケ年つづけて大正十年の春、三週年大會を開きましたこの頃から村内の人たちは勿論、近村の人たちも光明團の歩みに心をよせるようになりました。四月に大會がすむと、光明は、印刷になりました

□

光明が活字印刷になつてからは、私は貧困と戦はねばなりません。光明團をはじめから今日まで私は、一日として貧困の域を出た日とはありません。

三年、四年、私が本職の餘暇を勵んで光明を出しても、世の中には何の響きもないようです。凡人ですもの、もう今日限りやめやうと考へたことが何度あつたでせうか

食にさへ食はれませぬ。洋服を買ふお金さね、いゝに時には足袋一足すら買はませぬ。裏のない洋服で冬をすごした年もあります。借金が出來ます。印刷費がたまります。いよく行詰つた時、私をしてた、したものは『繼續は力なり』の一句であり、親鸞聖人の「死んだ後は死骸を賀茂川に棄てよ」の御言葉です。死んだあと葬式すら出せない、いゝに道ばたの松の肥になる心です。

大正十一年、私ははじめて廣島市に出て講演をしました。支部が出來ました。縣病院、市役所、其他市内で團員が出來まして、光明團の廣島市における基礎が出來ました。

私の体は多忙になりはじめました。土曜、日曜日には近村にまねかれはじめましたかうして四ケ年の忍苦は今や漸く曙光を認めたのでありました。もう光明團は一村のものではなかつたのです。飯室村における月々の例會は大盛會でありました。青年の手には光明がゆきわたり、壯年、老年に至るまで其主張に耳をかたむけはじめました

かうして遂に大正十二年は來たのです。

櫻花咲く四月の初め、五周年大會は開かれました。舉村一致です。眞に五百戸の全村あげて役員となり、仕事準備に總出ちとなりました。さうして三日間、白熱的な大會は行はれました。

五周年の大會後、嵐の後のやうな静けさが來ました。しかし其時青い惡魔の手は光明團の後に動きはじめました。「教育家が宗教宣傳をする」それが表面の理由で、裏面においては極めて惡質の宣傳がされて、私は重い試験の下におかれました。よいことにも動き易い人心は悪いことにも動き易いものです。飯室村を中心にして大きなうづ巻きがおきました。涙ぐましい人間性の誠も知りました。おそろしい毒瓜の忍苦の味も知らされました。詰局私は大正十二年七月飯室村をあとに、十ヶ年間御厄介になつた教育界を去ることに決心して單身、廣島市に出ました。私の手には借銭と念珠と聖

典一冊がありました。

廣島市では、前田修一様、前田島太郎様、森田様、龜谷様等の御親切で御厄介になりました。食ふに困る日が續いたのもこの月です。波瀾から苦闘へ、喪家の犬のやうな生活が續きます。

かうした中にも私は一家の相續者です。父と母は老ひゆくま、に田舎にゐます。この年の十二月、兩親、弟妹をつれて一家を廣島市にうつしました。今思ひ出してもはらはらするやうな冒險です。

それからもう五ヶ年たちました。東奔西走、幸に今日まで信仰のために生きさせて頂いて光明團も日に月に盛に、漸く動かぬ根を大地におろすことが出来ました。

感謝

何でも一人で出来るものではありません。光明團が無一物から今日になるまでには

如何に多くの同胞たちの努力が注がれたことであらふか。其時代、其時代に私の仕事を理解して真に同情し、援助して下さった方があればこそ、赤手空拳、今日の日が来たのです。

大きになればなるだけ、其裏には、大きな奉仕がかくれてゐます。十ヶ年！それは同胞の尊い誠の連続です。十周年にあたつて過去を懐古しつゝ謹んで深謝の合掌をささげずにはゐられませぬ。

大きくなれば、外部からの風雨の激しさも覺悟しなければなりません。今日まで各地の同胞が、悪罵にむくゆるに悪罵を持つてせず、迫害と攻撃との中にたちつゝもよく忍従精進の一道を進んで下さつたことを思ひ、いよく釋尊、聖人の御聖教の眞意を体得して、いよく精進の一道を歩み、健實なる求道と堂々たる聖戰に一層の覺悟を要求せざるを得ませぬ。

おとなつかしの同胞よ、時代は我等の上に動きつゝある。

十週年を迎ふるにあたつて、謹んで同胞の上におくる……………。

講演

不朽の生命

住岡狂風

生きねばならぬ

皆様今晚はよくこそ、多数お集り下さいました。唯今より不朽の生命と題して一席のお話を致します。

私どもは様々の願ひを持つてゐますが、其衷心の願は何でありませうか。曰く文化の向上、曰く藝術、曰く社會の改善、曰く何、曰く何……………いくらもありませ

うが、それらは大平無事の日のことでもあります。もつと根本に横たはつた願ひは何でせうか。

私は「生きたい！」この本能だと思ひます。平素友達と笑つて語る時、商賣に熱中してゐる日、そんな時には「生きたい！」と云ふ願ひはないやうにさね見へます。

しかし一步、足を人生の裏面に進めてみませう。私は福山市の中井外科醫院で御厄介になる日が多いので、怪我人や、手術を要する患者を常に見ます。人生の表に出て働いてゐる人が一寸機械にかまれます。汽車にしかれます。するとすぐ血まみれになつた不幸な人が活舞臺の裏面にひきこまれます。あたかも戦争に行つて第一線に立つて負傷した軍人が、後方に護送されて飯のように。かうした裏を見つめた時、其處には、生と死との際どい境にある世界をのぞかされます。

人間の心底に根強く……と云ふよりは全身の願ひとして「如何に生きる」ことに執着してゐるものであるかを知らされます。中井醫院の前には、二十歳位の女の子が

ぶる／＼ふるへながら立つて哀れにも金を求めてゐます。彼女には両親もなければ兄弟もありません。それに彼女はモルヒネ中毒にかゝつてゐます。一定の時間が來れば自分で注射機をだしてモルヒネを注射します。若しモルヒネがなくなれば彼女は動けなくなりません。彼女は乞食しつゝこのモルヒネを買ふべきお金を懸命に見出さねばなりません。お金をくれてがあれば、夜中でも藥店をおこして病む体に注射し辛じて彼女は生命をつないでゐます。名もなき一存在の彼女の魂にも「生きねばならぬ」この衷心の願求は盛に燃へてゐます。

若し死は何ともないといふ方がありませんならば、神佛か、或は愚者であります。いゝ眠れる魂であります。一度病床に横たはる時、死のかけは見えて來ます。さうした時、「生きたい！」この願ひは、衷心の願ひとなつて現はれます。

生への執着

かの有名な曇鸞大師は、生命の短いことを憂いて、長生不死の法をたづねました。さうして陶隱居と云ふ仙人を訪ひ、仙人の術を學びました。仙經を得て長安に飯り、偶々菩提流支三藏に出會ひ、陶隱居に學んだ仙教について語られますと、三藏は觀無量壽經を授けて長生不死の法を學ぶように教へました。曇鸞大師は深く觀經を色讀せられ、終に仙經を燒きすて、佛説に隨つて、不死の信仰的生命を得られました。肉体の死をいたんで、いつまでも生きて行かうとするのは、曇鸞大師一人の願ひではありません。

幸福といふも、歡樂と云ふも、現世の欲樂の全部が、肉体の生活の上に咲く花にすぎないことを思ふ時、肉体の根が一度枯れなば、人生の花やかな花は一切しぼんでゆきます。ですから一切の根本である肉体をいつまでも生きのばしたひとは人の心の衷心の願ひであらねばなりません。

釋尊は常に佛弟子たちにむかつて、「諸行無常」とお説きになりました。一切は移る一切は變る萬法何一つとしてとゞまるものはない。諸行は無常である。生ある者には死がある。出來たものはこはれて來たものは去る。萬物ごとく動き動いて變る。それが真相であり、まことのすがたであります。ですから釋尊は諸行無常であるといつ生絶叫されたのであります。

然るに我等はこの諸行無常の道理のまゝに生きることができないで、死をいとひ、生を求めてやみませぬ。

それは決して正しいことではありません。肉体的生命を求めてやまず、常住を求めてやまぬことは、それは渴愛であります。無明煩惱のはたらきであります。決して正しい智慧ではありません。それは迷ひである。まよへる者の願ひである。とは云はれても私どもの心は決して、『はいさうですか』と降參いたしませぬ。あくまで生に執着して久遠劫の流轉の舊里を捨てることをよろこびませぬ。さどつたつもりでも、一旦

病氣にでもとりつかれるとすぐ、本來の性を現はしてあくまで生きることには執着します。それが迷ひだ執はれたと云はれても、さそれないのが凡夫です。諸行無常とは道理ではわかつてゐます。わかつてゐても何にもなりません。死は我の一切の破滅です。幻にのみ生きる凡夫の、その幻の滅亡です。死といふ字すら見るのを厭ひます。死といふ音、四といふ数すらきらひます。友引の日に葬式を出すな、患者の部屋には病氣全快の祈禱のお守が掲げられ、病人の蒲團には△△神社の護札がつけられる。難破する船では我をさきにと争つて生きのびようとします。かくて諸行無常の言葉もそれは一片の美しい文字であり、單なる概念であります。

佛弟子の悲歎

いよく釋尊の上にも最後の時が來ました。娑羅雙樹の色ももの悲しく、二月十五日、釋尊は涅槃に臨みたまふたのであります。

無數の大比丘、菩薩たちは勿論道俗、男女、禽獸に至るまで娑羅雙樹の下に安臥したまふ正覺のみもとに集りました。安らかに横たはりたまふ釋尊を仰いで諸の衆生は心大いに憂惱し、聲をあげて悲號啼哭して『嗚呼慈父、痛ましき哉、苦しき哉』と手をあげて頭をうち、胸をうちて泣き叫ぶのであります。

各方面の大衆たちがお見舞に來て、それ々の誠をこめて供養します『唯願はくば世尊、我等が最後の供養を哀受したまへ。』と申せども如來時を知りて默然として許したまはず、來る者もく所願を果さず、心に愁惱をいだき、しりぞいて一面に座をとりまします。

彼等の悲しむ状を涅槃經の言葉をかきて云へば、『……………後にこれ最後に涅槃せんとするの相ならん、何ぞそれ苦しき哉。何ぞそれ苦しき哉。如何ぞ世尊、一旦四無量心を捨離して人天の奉るところの供養を受けず、聖慧の日光、今より永く滅し、無上の法船斯に沈没す。嗚呼痛ましき哉。世間大いに苦なり。』

と叫んでゐます。無上の法船こゝに沈没し、聖慧の日光、今より永く滅すとは、何たる悲痛な惱みでありませう。かうして悲しみの中から生れたのが即ち涅槃經であります。涅槃經は釋尊の肉体の亡ぶ日の經であります。

ほろばぬもの

肉体の滅ぶことに執着せざるものは如來であります。如來は今や地上の生をおはつて涅槃の雲に入らんとせられます。その悲しき日に何を説いたのでありませうか。凡夫は會ふた日には、會ふたことをよろこび、別れる日には別れることを悲しむことのみには執はれます。

釋尊は今や諸行無常の切なる境遇に立つて、お弟子たちにとかれまます。

『眞の解脱とは不生不滅なり。この故に、解脱即ちこれ如來なり。如來も亦しかなり不生不滅、不老不死、不破不壞なり。』

如來は不生であり。不死である。老いてゆくこともなければ死ぬることもない。破れることも壊れることもない。それが如來である。如來は決して有爲性ではない。

わしは汝たちに、人生は苦であるぞ空であるぞ、無常であるぞ、無我であるぞと教へた。しがしそれは、たつた一つの涅槃を覺らしめるためであつた。如來には、苦はない。まよひはない。無常は相對有爲の世界の現象のすがたである。小さなものに執着して如來を知らぬが故に我はない、諸法は無我だと教へた、それはしかし常恒の光に輝く涅槃の大我、如來の常住にして變易なきを知らせんがためであつたのだ。無常のものを常住だとあやまり常住のものを無常だと言ひ、苦なるものを樂と間違ひ、樂を知らずして苦を樂とあやまり、清淨ならざるものを清淨だと信じ、汚いものを汚いと思ひ知らないのが、凡夫の顛倒である。この顛倒の考へから救ひたいために、苦、空、無常、無我と説いたのである。それはやがて永遠に變らぬ、如來を知らせんがためであつた。

涅槃經全体に活躍してゐる説法は實にかうした、涅槃、如來、佛性の永遠不朽であることの高調であります。世尊は初め世の無常に泣き、老、病、死をいたんで求道の旅に出られ、遂に涅槃を得て佛陀とされました。釋尊の上に、如より來生して、不朽の佛体とされるもの、これ即ち佛であり、法身であり、佛性であり、眞理の光であります。されば釋尊は大迦葉尊者に云はれます。

『迦葉よ。譬へば醍醐の其性清淨なるが如し。如來も亦爾なり。父母の和合によりて生ずるに非ず、其性清淨なり。父母あることを示現する所以は、諸の衆生を化度せんがための故なり……………』

父母によつて生れるものは、生死無常の肉体であります。清淨なる法身は、父母によつては生れませぬ。

最後が訪れた時、人は其赤裸々な相をあらはします。死は實に總決算であり、最終であります。今や釋尊の最後の日に、光り輝くものは、常恒の色に輝く、永遠の大生命のみであります。

無量壽

『無量壽如來に歸命し……………』

とは正信偈の冠頭における親戀聖人の第一提唱でありました。

無量壽！ 無量壽！ 何といふなつかしい、そして我等の根本の願求にふれた雄々しい言葉でせうか。無量壽如來に歸命する！ これこそ、生を求めて生を得ず、死をいとふて死をのがれることの出来なかつた聖人の絶望を救ひ得た歡喜の第一聲でなくてはなりません。

生きたい／＼死にたくない。それはいかに強くとも肉体の生に執着した、諸行無常の眞理にはむかふ迷執でありました。迷ひだといはれても出ることの出来ぬ迷ひでありました。こゝにこの願ひが強くなればなるだけ絶望！ 絶望の深淵が待つてゐます

『……………然るに一息つがざれば千載ながくゆく……………』絶望の底に、新たなる道は開けて來ました。絶望である以上我等はこゝに新なる、肉体以外の方向にこの願ひを提げて、生命を求めねばならない。さうしてこゝに開かれた世界が、無量壽如來に歸命して永遠の生命に生きる世界であらねばなりません。それは即ち「信」の世界であります。

親鸞聖人は信卷の最初に、

『大信心とは

長生不老の神方

忻淨厭穢の妙術

選擇廻向の直心

……………』

かゝる句を十二つらねて信の値を讃嘆し、其相を示しておられます。其第一が、信は長生不死の神方であるとのみ言葉であります。

他方の信は無量壽如來の本願それ自体が顯現したものであります。如來の血そのものであります。我等の全ては諸行無常である限り、亡びるものであります。我等自身が亡ぶるものであるばかりでなく、我等の作れるものも、諸行無常の前には幻であります。雷であります。相對有限、諸行無常である者の上に無量壽如來の生命は大本願となつて働き、信心となつて顯現します。かくて大信心のみは、長生不死の神方であります。信は不朽の大生命であります。我等は、この信に乗托して、死をこね、生をこね、あるがまゝに、はからはれて久遠の親里に往生いたします。

今日一日の生活、一步一步の生死の中に如來の不朽の大生命を織りなされてゆく、今日の信が永遠の世界へ通ずることを感ずる時、我等は、こゝに衷心の願求を満足せしめられた、よろこびを感じます。

生……………そして……………死、この大問題の解決をさしおいての安價なる

生の舞踏は、火山上の亂舞にも似たる悲劇であります。

南無阿彌陀佛の中に誕生したことをよろこぶものであります。長生不死の大生命の中に生れ出た我等はこゝにこの大生命を足場にして現實の生活にかへつてゆきます時おちついた生活がこゝに恵まれます。(終り)

講演豫定

十一月十一日發

十二月一日、岡山市 十四日、姫路市 十五日、神戸市 十七日、十八日、十九日、東京市

二十一日—廿日、廣島市内宣傳

◎十二月一日、二日、三日、十週年大會—

五日、六日、七日、深安郡照專寺 八日、九日、十日、福山宗教講座 十二日—十五日、佐伯郡

大柿町 十六日—十九日、山縣郡安野村

十週年大會が來ました！

皆様たのみます!!!

主管 住 岡 狂 風

廣島市へ！

いよく十週年大會が來ました皆様お願ひいたします。

皆様の光明團は皆様の愛と御援助とによつて發展いたします。

もう決して左右をながめてゐる秋ではありません。舉團一致、猛進しなければなりません。

一度で本團の眞精神が知られなければ、二度、二度が駄目なら三度、決死の勇で、本團の主張を實現しなくてはなりません。

事情のゆるす限り、一人でも多くこの大會に参加して下さい。

來れ！ 廣島市へ！

本部員一同は、はれやかにお待ちしてゐます。一人でも友をさそつてこの聖戦に参加して下さい。

(御來會の方は十一月二十五日までに本部宛に御申込み下さい。)

誌友紹介

十週年紀念に團員の皆様にお願ひします。光明及び聖光の誌友を一人でもいゝ御紹介下さい。お友達の方々に、お知合の方々に一人から一人へとお傳へ下さい。唯さうした方法によつてのみ本團の主張は民衆の上に生きて來ます。非難もおこりませう。攻撃もされませう。しかしあなたの地方に二人三人とお友達が出來た時、あなたを中心に、如來中心の會をおはじめ下さい。二人が三人三人が五人にしつくりした毎月の

つとむを開いて下さい。

各支部は

各支部はこの際、團結して擧げて大會に参加を願ひます。参加して下さい。其人員の大畧を十一月二十五日迄に本部まで御申込み下さい。宿舍の心配があります。支部誌友五十名以上といふ責任數に達しない支部及び減少したまゝになつてゐる支部はこの際責任數以上をお作り下さい。

各支部は毎月例會を開いて光明及び聖光中心の輪讀會をお開き下さい。本團々歌を地方の青年男女及び小學兒童の上に徹底して下さい。

團費不納の方が多くて事務は困つてゐます。前金切の通知があつたら振替で拂込んで下さい。

皆 様

本團は創業十週年を迎へましたけれど、まだ其準備期をおはつただけです。十週年大會は、本團史の上に一紀元を畫するものでなくてはなりません。各地では具体的方法によつて各地に、聖なる運動をおこして下さい。

本部は勿論、團員皆様の奮起をお願ひ致します。皆様の御援助は本團の血となり肉となつて、社會淨化の源泉となります。

合掌してお願ひいたします。

來れ！ 十週年大會へ！

來れ！ 來りて助けよ！！

◎ 誌友の紹介をたのむ！

講 師 龍谷大學教授 龜川教信師外數名

期 日 十二月一日、二日、三日、

午後一時半 午後七時半

會 場 藝備銀行階上

光明團 十週年 佛 教 大 講 演 會

其 他 十週年紀念式典

支部代表會議 餘興

團員の總動員！！

◎ あなたの住む村に光のうづまきを作れ！

講演 の旅

□十月、四日夜より七日夜まで豊田郡河内支部。四日夕方中務氏宅に入る。会場河内説教場、養蠶の都合や

其他のつかねて聴講者が少ない。河

内高等女学校の生徒中熱心者があつて嬉しかった。中務の奥様の里の母上が、病氣で奥さんば里に行つたり河内にかへつたりで御多忙、七日夜行で福山へ。

□八日より十日まで、蘆品郡宣山村福専寺。お宿は石井醫院、石井醫院の皆様は熱心に求道される。

□十二日より十五日まで、福山市精神文化協會主催、会場最善寺、夜の講題「強者なる道」といふので若い人のあつまりで大盛會、晝は信卷の冠頭十二句について味はふ、中井醫院はお客様で大にきはひ、いつも

ながら青年男女、智識階級の來聴者で大盛會裏に閉會□十七日夜福山紡績、福紡は最初であるが、中に數名大變熱心な方があつて、前からおなじみである。

本年八月、あの熱心だつた造賀さんが亡くなつたのが残念、若しこのたびの會にあたらさんなに喜ぶことであつたかと思ふ。今後この地方であるたびに行くことなる。

□十九日から三日間、福山市宗教講座、講題「一切衆生悉有佛性」菩薩の六度や、莊嚴淨土、願生淨土の關係を見つゝ、聖人の世界でおほつた。

私にまつてよほど有益な會であつた。聴講者も極めて熱心、いづれ又一冊になつて出ますから御購讀お願ひします。

□廿二日市村處女會婦人會、敬老會、におもむき一席の講話をする。

□廿二日——廿三日 千田村にて講演する。廿三日夜は小學校で講演、いつもながら大盛會であつた。藤井校長は眞言の行者、村民は學校の宗教講演に訓練づけられてよくあつまる。

□廿七日夜府中町の松岡で一席講演する。因果超越の世界について語る。一家そろつて御熱心な求道である□卅日より三日間、芦品郡、萬能藏の歡喜庵で、大派お講佛の講演會である。奥様は前から心安い。一日夕方福山市中井醫院へかへる。

□本部例會、二日三日だけ私が話した。吉藤君が東京からかへつてゐる。盛會であつた。

□四日——七日 佐伯郡大野村、高橋三郎氏亡妻一週忌講演會、会場佛教會館、農繁にむかつており、寺院の説教と一緒にだつたのになりのあつまりであつた。殊に夜分は大盛會であつた。

更地から一里以上の道をふんで熱心に求道される。來年三月を約束してかへる。これから三日間本部で滞在。御大典奉祝。

□本部は大會前で色々多忙。今からそれ〴〵支度際中である。無事に大會がすめばさみな心配してゐる。

▲オコトハリ 二九頁より三一頁迄が前後してゐますから御注意してお讀み下さい。